

母校の玄関スロープ

新型コロナウイルスの脅威の中で、感染防止策を施して開かれたセミナーに参加しました。社会福祉法人南魚沼福祉会の主催で、障がい者が移動する際の障壁とその解消法を理解し、住みよい地域づくりに生かそうというものです。講師は、同級生の佐藤聡君でした。現在、彼は障がい者の国際組織である認定NPO法人DPI（障がい者インターナショナル）日本会議の事務局長で、内閣府や国土交通省の政策委員なども務め大活躍しています。つい最近のニュースでも、赤羽国土交通大臣と彼が並んで新幹線の車両改善の実現について伝えていました。

出会いは高校時代。こんな男がいるのかと、驚いたことを覚えています。階段は束ねた足のフックを手すりにくくり付け、腕だけで上り下り。人の助力を爽やかに断る。力自慢の私も腕相撲では1度も勝てず。マラソン大会にも出場する、しかも速かった。登下校は、自宅「四十日」から毎日車いすです。とにかく明るい人気者。何より凛としていました。

彼にまつわる話がひとつ。

冬季、スキー場の私の家に泊まり込んでアルバイトをしていた親友は、学校がある日は決まって、私よりも1本早い電車で石打駅から高校に。「野球部の朝練かな」と不思議にも思わなかったが、程なく理由を知ることになった。冬だけは自動車を通う彼の車いすが、降雪時には玄関のスロープを上れない。豪雪の年が続いて難儀をしているご両親の姿を見た親友は、早朝に登校してスロープを1人で除雪していたのです。それを知り、私は自分が恥ずかしくなりました。その後、聞き知った野球部の有志や仲間たち、生徒会報で紹介すると若い先生たちも加わることに。親友の一步がみんなを動かした。この温かい思い出を彼が話してくれた。

現在、市も障がい者や高齢者が住みやすい街づくりを進めています。程遠い。「社会は変わる、いつか当たり前の世の中に」と、がんばる旧友に「市のアドバイザーを頼むよ」と言う。「いいよ」と、あのころと変わらぬ明るさで快諾してくれた。彼に恥じることない故郷にしなければ。

国際大学留学生 お国自慢コーナー ～boast of my country～

タジキスタン共和国 ナモゾフ アスリディン さん



私の国はこんなところ

タジキスタンは、中央アジアの山地にある内陸国です。首都はドゥシャンベ（月曜日という意味）にあり、公用語はタジク語で、第二言語はロシア語です。

日本と同様に四季がある国で、多種多様な民族が暮らしています。タジキスタン人は世界でも親切な性格で知られており、私たちの国を好んで訪れる観光客もいます。ドゥシャンベのシンボルは、フリーダムスクエアに建立された「イスモイル・ソモニ」の記念碑で、高さは25m以上です。



タジキスタン共和国

公用語	タジク語
首都	ドゥシャンベ
面積	143,100km ² (92位)
人口	9,300,000人
GDP(PPP)	260億ドル (131位)
通貨	ソモニ (TJS)

※ GDPは国内総生産のことで、購買力平価説 (PPP) により算出した数値です

南魚沼市に住んで感じたこと

私は、日本の美しく近代的な風景が大好きです。平成29年に初めてタジキスタンの公式代表団として訪問しました。その後、平成30年に公共経営・政策分析プログラムの学生として国際大学に入学しました。

日本到着後、いくつかの地域を訪問し、最後に新潟県を訪れ、浦佐に到着した時、その自然と美しさに大変驚きました。地域の人たちは私たち学生にとっても親切で、家族のように感じます。私は、日本でみそラーメンがとても大好きになりました。